

## ○人物登場：三分一博志氏 (建築家)

9月23日にグランドオープンする「おりづるタワー」の設計者三分一氏から話を聞く機会を得た。氏は2011年に犬島精錬所美術館で日本建築学会賞作品賞他を受賞し、広島で活躍する建築家である。最近の作品の設計を通して建築に取り組む姿勢を紹介してもらった。

### ☆ 直島ホール (2015年完成)

直島は香川県の瀬戸内海に浮かぶ島で、瀬戸内国際芸術祭2016が開催中。16世紀末に城が築かれた城下町で基盤目状の街区が今も受け継がれています。2年半の集落調査の結果、風・水・太陽の動きから集落が形づくられ、建物の配置と平面計画がなされていることがわかりました。

直島ホールは町が運営する町民会館で、ホールの大屋根は直島に多く見られる入母屋形式で風穴を開け、直島の風と屋根の関係から生じる圧力差によって風が抜けるように設計しています。

### ☆ おりづるタワー

築40年近いビルを広島マツダが買い取り、改修して平和の象徴的な建物として蘇らせ、屋上等の一部を観光客や市民に開放しています。

はじめて既存建物の屋上に上ったとき、心地よい風が吹き抜け、眼下に映える緑と川、山々や島々に囲まれたパノラマに改めて感動を覚え、市民や海外の人たちにこの広島の美しさ、被爆からの復興を手助けした広島の風を体感してもらいたいとの思いを込めて屋上の「ひろしまの丘」を設計しました。

また従来タワーのようにエレベーターで一気に展望台まで上がるだけでなく、スロープを歩いて上ることも可能で、だんだんと風が抜けていくことを体感できます。川の干満や街を歩く人びとやその暮らしも見え、広島の街らしい身の丈の高さになっています。

### ☆ 動く素材「風・水・太陽」を活かす

風や水、太陽などの動く素材は地形から生まれています。その地域固有の動く素材を理解し、それに適したかたちを与えていくことで街や集落の文化、歴史、習慣が育まれます。

建築の動く素材は人類・宗教・時代を超えた共通の言語であり、建築が地球の一部となることをテーマにいつも取り組んでいます。

### ☆ 広島のみち

広島は風と水を通して呼吸しているまち。夏には風を挟んで昼の海風と夜の山風が交互に吹き、空気が入替わります。川も6時間毎に上下3mの潮の干満を繰り返す、水が入替わります。この太古から変わらぬ自然の営みが広島のみちを浄化し続けてくれました。

風と水こそ広島のみちの基本であり、特に風をリレーしていく形を追い求めています。それはおりづるタワーに込めたメッセージでもあります。

**\*参考文献：「三分一博志 瀬戸内の建築」(TOTO出版)**

<http://www.toto.co.jp/publishing/detail/A0357.htm>

略歴：建築が地球の一部になることをテーマに瀬戸内に根ざした設計を行う。「犬島精錬所美術館」(岡山)で日本建築学会賞作品賞、日本建築大賞を同時受賞。

「宮島弥山展望台」(広島)からの眺望は、『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で三つ星になるなど海外の評価も高い。その他代表作に「直島ホール」(香川)、自然体感展望台「六甲枝垂れ」(兵庫)など。現在、デンマーク王立芸術アカデミー教授(非常勤)。



直島ホール(所有:直島町)  
(撮影:小川重雄)



左下がおりづるタワー  
(中国新聞、撮影:福井宏史)



ひろしまの丘からの展望



ひろしまの丘

**\*コメント\*** ひろしまの丘に上がると、吹き抜ける風が心地よく、眺めも良い。読者の皆さんもひろしまの風を感じに一度登ってみてはいかがでしょう。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第28号（平成29年3月15日）

## ○人物登場：千原康弘氏（日本建築家協会中国支部広島地域会長）

東広島市在住のため地域会の役員会が始まる前に、日本建築家協会中国支部事務局（広島市内）の建築サロンで取材を行う。

### ☆ これまでの軌跡

小学校2年まで千葉で育ち、茨城のつくば市に引越し高校まで生活。自宅が大きな分譲住宅団地内にあり、刻々と変化する住宅建設のプロセスを目にして、興味を抱いたのが建築への関心の土壌となった。

大学で建築学科を選択し、東広島での生活がスタート。卒業後、大和ハウス工業に入社するが、住宅の大量生産に飽き足らず、設計事務所へ転職。2014年に現在のC&C DESIGN ARCHITECTを立ち上げる。

### ☆ 建築家としての活動

今は個人住宅の設計が中心。建築の細部まで掌握できるので達成感がある。まだ代表作と言えるものはなく、自分のスタイルを確立中だが、私のデザインを気に入って注文が来る。顧客とのマンツーマンの折衝の中で、説得力等が鍛えられている。

好きな建築はフランク・ロイド・ライトのカウフマン邸（落水荘）。あの大胆なデザイン、肌ざわりのよい素材感、温かそうな居住空間を知ればファンになる人が多いと思う。

なお、C&Cは独りよがりにならないようにと戒めを込めて、千原のCとクライアント（顧客）のCを名称につけている。

### ☆ 日本建築家協会中国支部広島地域会長就任

建築仲間との情報交換が欲しいため2010年に建築家協会に入会。建築士会や建築事務所協会にも加入しているが、純粹に建築好きな人が集まっており、ここが一番居心地がよい。

昨年、広島地域会長に就任し、何ができるかを役員とともに模索中である。組織が小さいため何かを発信しても波及エリアが狭い現状をなんとか打破していきたい。

#### ・建築家協会とは

利益集団ではない。公益社団法人であり、自分たちの守備範囲である建築やまちを良くしたいと思っている仲間が集まって、自分たちの活動を通して建築文化（建築の面白さやまちの楽しさ）を市民に広めていくことを目指している。支部の中に県単位で地域会がある。

#### ・地域会長としての抱負

問題になっている建築やまちづくりに対して批判する高い職能を持った建築家もいるが、まずは身近なところから足元を固めていきたい。

例えば、「平和の鐘」をつくイベントに参加し、合わせて建築を絡めた交流会や見学会などを実施する。市民にも門戸を開き、つながりを深めていければよいと思う。

最近、まち歩き等が多くの市民団体で催されているが、建築家が脚色することにより、趣向をこらした楽しい空間体験やおもてなしが可能であり、今後の課題として取り組んでいきたい。

また地域会主体の賞などを作って、良いものを社会に発信する仕組みも検討してみたい。

### ☆ 建築とまちづくり

昨秋、江津市で中国支部大会が開かれ、古い建物や歴史を感じさせる町並みを歩いて小旅行気分を味わった。わざわざ京都に行かなくても、近場の竹原などに行けば日本人のルーツに出会える。海外に旅して改めて日本の良さを発見するのもよいが、国内にも良い所が沢山ある。



略歴：1975年東京都生まれ。1998年近畿大学工学部建築学科卒、大和ハウス工業入社  
2014年C&C DESIGN ARCHITECT 設立  
2016年日本建築家協会広島地域会長



落水荘

歩いて気持ちの良い風景は残るし、市民からも愛されるので、そういう風景になるような建築を作っていく努力をしていかなければいけない。

#### ☆ これからの夢

大志ではないが、建築を軸に語り合える仲間を増やしていきたい。建築の仕事も量より質を大事にし、いかに自分の納得のいく仕事ができるかを追求したい。

#### \*コメント\*

建築家にもタイプはいろいろあるが、地に足をつけて着実に歩んでいこうとする姿勢に共感する。今後の活躍に期待したい。聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第29号（平成29年5月15日）

### ○ 人物登場：中村 圭氏（広島市立大学芸術学部講師）

今回は基町住宅地区の活性化のために大学講師の立場で基町プロジェクトを牽引している人に登場してもらった。

#### ☆ これまでの軌跡

大分に生まれ育つ。大学進学時に希望するデザイン系の大学が近くになく、1994年に開校した広島市立大学に第1期生として入学。大学院修了後も無給の協力研究員として大学に残り、非常勤助教を経て現在に至る。自分たちのアート作品の展示会場を探しているうちに広島のまちを知り、興味を持つようになる。外から来た人間として相生通から南側の平和記念公園と原爆ドームは知っていたが、北側のことは関心がなかった。

2009年に市民球場が移転して跡地利用の検討がなされ始め、自分たちも大学仲間とアートの側面から『Hiroshima Creative Park』を提案。平和記念資料館や原爆ドームを見た後は、描いたり、歌ったり、踊ったり、若者が躍動し、広島の未来を感じさせる場が中央公園側に求められている。

#### ☆ 基町プロジェクトとの出会い

2013年に市が策定した「基町住宅地区活性化計画」のメニューの一つに掲げられた「アートによる魅力づくり」の関係から市立大学芸術学部へ依頼があり、翌年度から中区役所と連携して試験的な「基町プロジェクト」の活動を開始。

2015年に「創造的な文化芸術活動で基町住宅地区の魅力づくり・活性化を目指す」というプロジェクトの基本コンセプトを策定し、長期的な目標を見据えた活動をスタート。

#### ☆ 基町プロジェクトとは

プロジェクトの目標を達成するため、市立大学の特徴を生かした「学び」「創造」「交流」の3つの場づくりに取り組んでいる。

**学びの場**は、地区内に幼稚園や小学校があり、近くに高等学校もあるので、市内の他大学とも協働してワークショップなど若者の学びの機会を作り、地域の人材育成に寄与。

**創造の場**は、空き店舗の活用など若いクリエイターの活動を支援する環境を提供し、その成果を地域に還元。またクリエイターの雇用の機会の創出も目指す。

**交流の場**は、基町をテーマにした作品展示会やシンポジウムなど地区内外の人たちの交流の機会を作り、また地区内には外国籍の人が多いため、多様な文化が交流する場を創出。

#### ・基町プロジェクトの活動拠点

空き店舗を改修して活動拠点「M98」（基町のMに室番号）を開設し、2名のスタッフが週3日程度常駐。住民から地域の一員として認められ、地域の抱える問題や要望を聞きながら、3つの場づくりの実務を行っている。

#### ・地域住民との関わり

スタッフの日常的な付き合いのほか、もとまちカフェと称して移動式屋台などを持ち込み、住民や内外の人たちとの交流の場に役立てている。



略歴：1975年大分県生まれ。2003年広島市立大学院修了後、同大学に残り、現在講師



昨年から調理場を使った食のイベントに住民の参加者が増えている。今年からは地域包括支援センター「ほのぼの」と連携して一緒に活動することにより地域との関わりを深めていく。

#### ・これからの展望

過去3年間の活動は試行錯誤的なイベント型が多かった。これからは単発で終わるのではなく、次に残ってつながるものにしたい。例えば、地区の模型も作って終わりではなく、地区の紹介用に展示されたり、将来像の検討用に利用されたり等々。

商店街の空き店舗に若い人が進出してアート活動などの拠点になるような支援もしたい。

#### ☆ 個人的な抱負

原爆ドームを中心に据え、『平和と慰霊』の平和記念公園エリアと『創造と復興』の中央公園エリアが一体となって広島メッセージが発信できると考えており、その理想像を描きたい。

#### \*コメント\*

広島を中心地のことを考えているグループが他にもあるので、ネットワーク化して協働できるようになればよいと思う。  
聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第31号（平成29年9月15日）

### ○ 人物登場：杉田 宗氏（建築家・広島工業大学環境学部建築デザイン学科助教）

米国で最先端の建築技術を学び、親元の設計事務所の勤務を経て、大学で教鞭をとる若き建築家の登場である。

#### ☆ これまでの軌跡

広島に生まれ育つ。高校3年の時、交換留学生として米国で過ごし、そのままニューヨークの大学に進み、インテリアデザインを学ぶ。在学中に9.11テロが発生し、学園内が意気消沈したため1年間休学を取り、バックパッカーとしてヨーロッパを旅する。大学卒業後、米国(2年)と中国(1年)の設計事務所を経験した上で、大学院修士課程に進み、コンピューターを駆使した最新の建築手法を学ぶ。その手法を日本で活かせるか不安もあったが、2代続く事務所を将来引き継ぐため2010年に広島に戻る。

2012年より2年間、東京大学の国際都市建築デザインコースのアシスタントを務め、2015年から広工大の助教として、建築を主語としたデジタルデザインを教える。

#### ☆ 広島工業大学での仕事

現在、2016年に改編された建築デザイン学科にて、米国で学んだ先端の設計技術の講座を担当。コンピューテーショナルデザイン、デジタルファブリケーション、ビルディング・インフォメーション・モデリング(BIM)の3本柱を教える。

設計条件を与えれば最適な設計が出来上がる人工知能システムにも取り組み、未来の建築現場が人間と3Dプリンターとロボットが協力して働くハイブリッドな空間になることを目指す。

まだ他の大学では導入されていない新分野の建築人材育成に取り組み、自分の得意な武器を持って社会に飛び出せる学生を育てたいという当面の目標を持っている。

#### ☆ TREES WORK SESSIONについて

TREESは若手の建築家やデザイナーが集うトークイベントの会。2015年にその会のメンバーが中心となって「宮島口まちづくり国際コンペ」に参加。建築家は他の職種の人と組んでチームを作る。最初にみんなで意見交換する場を設け、次に現地調査(ワークショップ)をし、締め切り1か月前に各チームの発表会を行う。その過程をすべて市民にオープンにした。

昨年秋の旧広島陸軍被服支廠倉庫のイベントでは、見学会に合わせて模型作りのワークショップを開催。見学者にも参加してもらい、出来上がった模型は倉庫近くに置いて、旧被服支廠に対するコメントやアイデアを付箋で張り付けてもらう。



略歴：1979年広島市生まれ。2010年ペンシルバニア大学大学院建築学科修士課程修了後、杉田三郎建築設計事務所入社。現在広島工業大学助教

建築の在り方や使われ方は建築家だけでは解けない課題が沢山あり、多くの知恵を集めることが大事と思っている。上記二つのまちに開かれたイベントでは、専門家以外の住民などの視点が入り、新たなまちづくりのアプローチにつながっていくのではないかな。

### ★ まちづくりの動向

まちづくりも建築家の専売特許ではなく、最近ではIT系やイノベーション関連の人たちのテーマとなっている。そちらの方がイベントも動員力があるし、幅広い内容が語られている。

ロンドンでは行政主導のまちづくりから市民参加型に移行し、議論では結論を出さない方針という。多様な意見の中からヒントを得て、それを具現化できる人たちが議論に参加している。

一つに案を絞るのも大事なステップだが、散在しているいろいろな意見を拾い上げる作業が一番難しく価値のあることである。そこを疎かにすると実のあるプランにならない。

### ★ 平和の先に何がある？

平和都市に辟易している人も多いと思うが、広島にしかできないことを目指すべきである。自分の研究室が中心となって活動しているヒロシマ・デザイン・ラボのテーマとして「**PEACE and Beyond**」（平和とその先）を掲げている。広島もこれまで追い求めてきた「平和」の先に、何があるのかをみんなでも考えられるまちになれば、次の布石になるのではないかな。

多くの人と関わりながら共に考えていきたい。

### \* コメント \*

新しい世界を切り開いていこうという気概を感じた。これからの活躍に期待したい。

聞き手: 編集委員 前岡智之、瀧口信二 (文責)

## 第32号 (平成29年11月15日)

### ○ 人物登場: 堀口 力氏 (樹木医)

広島の被爆樹を見守っている樹木医を訪ねる。本宅の向かいの菜園に囲まれた離れ(書齋)があり、そこで取材する。

### ★ これまでの軌跡

宮崎育ち。鹿児島島の大学4年生の夏休みに屋久島の山に登り、半年前に発見されたばかりの「縄文杉」に出会い、その大きな感動から木に関わる職業に就く決心をする。

卒業後1年間、福岡の植木屋で予備知識を習得し、翌年に縁あって広島の造園会社に就職。当初、日本庭園をやりたいという思いがあったが、広島に住んで、広島に木を植えることは平和に資することに気付かされる。

28歳の頃、日本で初めて「樹医」を名乗った第一人者の山野忠彦氏に出会い、「広島の被爆樹木を守りなさい」とアドバイスを受ける。

1991年に樹木医資格制度ができ、翌年に資格を取得。50歳(1995年)に独立し、樹木医として活動を始める。

被爆樹木の保全などの功績が評価され、2015年に広島市民賞を受賞。



略歴: 1945年生まれ、宮崎県出身。1968年鹿児島経済大学卒業。1969年広島の造園会社に就職。1995年独立し、樹木医として活躍

### ★ 被爆樹木が注目され始める

昭和48年、広島通信病院で被爆したアオギリ3本が平和記念公園に移植され、沼田鈴子さんが語り部として活動されたことから注目されるようになる。その10年後、基町小学校の6年生が大事に見守っていた被爆エノキが台風で折れた時、マスコミ各社が大きく取り上げ話題となる。市も関心を寄せ、「中区民だより」を使って市民に呼び掛け、身近な被爆樹木の情報を集め始める。

### ★ 物言わぬ証人としての平和発信

被爆者が高齢化して被爆体験を語る人が少なくなるなか、物言わぬ証人として被爆建物や被爆樹木に期待が集まる。市は1996年から「被爆樹木」を登録し、2005年にその生命

力で多くの人々を勇気づけてきた被爆樹木を後世に伝えるため「緑の伝言プロジェクト」をスタート。その一環で被爆樹めぐりが始まり、ガイド役を務めている。

2011年には国連訓練調査研究所（ユニタール）とANT-Hiroshimaが中心となって「グリーン・レガシー・ヒロシマ（GLH）」が創設され、被爆樹木を守り、その存在と意味を広く世界に伝えていくため、被爆樹木の種や苗を配布し植える活動を続けている。

昨年秋、ジュネーブ国連欧州本部において、潘基文国連事務総長による広島から寄贈された被爆樹2世のイチヨウ苗木の記念植樹式が行われ、GLHを代表して出席した。

#### ☆ 被爆樹木の保存の考え方

昨年度、市による本格的な樹勢調査を実施。4割程度が「不良」の結果が出たが、街路樹や公園の樹木などと樹勢においては大きな違いはない。被爆によるダメージの影響が出なかった理由として、強い個体の木が残っている、被爆樹は大切に守られている、などが考えられる。

保存の基本的な考え方は、樹木の持つ生命力とあるがままの姿を尊重し、なるべく人為的な手を加えない必要最小限の手当てで見守り続けること。剪定は被爆樹では最小限にとどめる。

#### ☆ これからの話

原爆を生き延びた樹木とその子孫の木を大事に残していくことは広島の使命である。今自宅の庭の片隅で2世の苗を育てているが、手狭なため広島大学の圃場で育ててもらい、大学構内に平和ロードを設けて植えていく計画がある。

現在、市は比治山の「平和の丘構想」を検討中。ふもとにある山陽文徳殿は被爆建物で、被爆樹ソメイヨシノも生存しているが、荒れたままである。改装して被爆建物や被爆樹木を守っていく活動の拠点とすることが、平和の丘構想に合致しているのではないかと提案している。

市の職員の中にも樹木医がいろいろな部署に在席し、協力しながらやっているのでも育っている。

#### \*コメント\*

被爆樹木の保存に真摯に取り組む姿勢に頭が下がる。天職に恵まれることは素晴らしい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）